

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 年～2009 年
 課題番号：19520655
 研究課題名（和文） 東アジア古代王権と王陵の比較研究
 研究課題名（英文） The comparative study of Royalty and Royal mausoleums in ancient east Asia

研究代表者

東 潮 (AZUMA USHIO)
 徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授
 研究者番号：70243673

研究成果の概要（和文）：3 世紀代の、『三国志』東夷伝諸国、5 世紀代の『宋書』倭国伝諸国、3～7 世紀代の中国・韓国朝鮮・日本古代の墓制（王陵・壁画墓）の比較研究によって、東アジア古代の王権をめぐる国際環境をあきらかにしえた。東アジア諸地域の諸国・諸民族はさまざまな政治的・経済的な国際関係、国際交流のなかで歴史的に発展してきたことを具体的に追求しえた。

研究成果の概要（英文）：The Studies of The countries mentioned in ' "Sanguozhi (三国志)" (History of the Three Kingdoms) 、"Songshu (宋書)" and the east Asian countries , until 7's century from the 3's century was made on. The countries and races of the East Asian area could pursue the matter that it had developed in the International relations Political Economical International interchange historically concretely.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：王権、王陵、東アジア古代

1. 研究開始当初の背景

研究の目的は、3～7 世紀の東アジア諸地域(日本、韓国朝鮮、中国)における古代王権と王陵を比較研究することにあつた。

第 1 は、朝鮮古代(高句麗、百濟、新羅、加耶)の墳墓・遺物(装身具、武器)を型式学的研究法によって編年し、王陵を比定する。

王陵の構造、築造規格、立地条件、壁画などを分析し、陵園制・陵寝制を解明する。そのうえで中国古代(魏晋南北朝、隋唐)や日本古代(倭)の墓制と比較する。

第 2 は、墓室壁画の図像学的解釈である。墓主、墓主行列、鹵簿、狩猟、天井日月、四神などの図像学的解釈によって昇仙、葬送、

風水思想、統治など、壁画に表現された諸思想を解明する。壁画を考古資料、歴史資料として位置づけ、朝鮮・中国・日本の東アジア地域の壁画墓を研究対象とする。

今日の諸民族と歴史上、興亡した諸国・諸民族と峻別してとらえようとした。

2. 研究の目的

東アジア（日本、朝鮮・韓国・中国）の古代王権について、朝鮮古代を基軸に王陵や陵園（寝）制、壁画、行幸・巡狩・狩猟儀礼・王権（皇帝）祭祀などを比較することにある。巨大構造物、巨石墳、巨大古墳と王権力の関係、王権と支配領域、統治思想などについて考察する。

歴史上の諸国に関しては、現在の領土・国境、民族の帰属をめぐる政治的問題とはべつに、時空的、実証的な研究が必要である。たとえば高句麗史は高句麗史であり、今日の中国や韓国朝鮮の現在の領域と異にする。

これまでの調査研究の成果をもとに、3～7世紀の東アジアの古代王権を比較することにある。古代の王権力、戦争、古代人の思惟など解明しえる。一つの試みとして、東アジア世界のなかで、前漢、高句麗、飛鳥時代の日本の墳墓、王陵、陵園（寝）制を比較し、王権や国家の発展段階をとらえる

3. 研究の方法

フィールド調査をもとに、墓制の考古学的研究と壁画の図像学的研究をおこなった。

4. 研究成果

(1)『三国志』東夷伝の研究をつうじて、東夷伝が魏の天下思想にもとづいて記述されていることを明らかにした。高句麗・倭などの東夷諸国は魏の天下観によると蕃国・蛮族で、支配される対象であった。邪馬台国の所在地も東夷伝を検討し、考古資料によって、奈良盆地から大阪平野一帯の地であることをみちびきだした。

3世紀の東夷諸国の高句麗・夫餘・挹婁・韓・倭の墓制、身分制の分析によって、王権力を比較しえた。

『三国志』東夷伝の冒頭に、『尚書』禹貢篇や『周礼』の九服の制について明記され、そうした天下観にもとづき、公孫氏を討伐して「絶域」を開放し、楽浪・帯方郡を支配した。東夷は屈服した。さらに高句麗の背反にたいして討伐し、東海の地まで征服した。その恩恵で東夷諸国について記述でき、夷狄の国に礼のあることも知られるようになった。東夷諸国とその都の位置関係、里程、境域を

検討したところ、倭人伝もふくめ東夷伝が天下観にもとづき記載されている。魏による東方征服の脈絡がある。倭人伝は洛陽―楽浪の五千里の禹貢の五服説、帯方郡から邪馬台国までの万二千里は『周礼』の九服説による。京師からの地理観を郡治から距離観におきかえる小天下観である。従来の里程論の矛盾を解決しえる。各国の遺跡・遺物の特徴型式を抽出し、その分布圏を境域としてとられた。

いわゆる「魏志倭人伝」は『三国志』東夷伝の一部であるという自明のことをふまえ、「魏志東夷伝」全体を対象として研究した。

倭人条にみえる倭王卑弥呼への「親魏倭王」の金印紫綬、難升米への「率善中郎将」の銀印紫綬、「黄幢（軍旗）」の授受は、魏と倭が朝貢関係とともに軍事同盟の段階にあったことを、従来の研究史をふまえて展開した。その黄幢の授与の背景に、魏と高句麗の征服戦争があったと解釈される（武田幸男1997「朝鮮の古代から新羅・渤海へ」『世界の歴史』6、中央公論社）。東夷伝の冒頭に、高句麗討伐のことが記されている。

弥生時代から古墳時代の鉄の生産と流通について再論した。倭は馬韓、濊とともに弁辰（韓）と鉄素材の交易をおこなっていた。対馬・一支国の集団が「南北市糴」していた。鉄素材と穀物（コメ）の交易をしていたのであった。南北市糴の意味は、東夷伝のなかで位置づけてはじめて解釈しえる。

倭国の宮都が所在する邪馬台国の境域内に、倭国王系列と邪馬台国王系列の墓のあることを指摘した。卑弥呼の墓は箸墓古墳（奈良県桜井市）で、倭国王として各地からの労働力によって築造された。倭王族が形成されていく。同一血族ではないが、4世紀代に倭王と邪馬台国王は一体化する。5世紀の倭王族（倭の五王）に継承される。

卑弥呼墓には殉葬がともなう。卑弥呼の王権は野蛮、未開段階にあった。呪術王として卑弥呼を政治的に補佐する男弟がいた。

魏から倭国王「好物」として与えられた百枚の銅鏡には景初3年（239）銘鏡がふくまれていたのであろう。その以前の青龍3（235）年鏡を重視している。つまり楽浪・帯方郡を管轄していた公孫氏政権によって将来されたとみる。青龍5（237）年3月に景初元年4月と改元される。238年に魏は公孫氏を滅ぼし、楽浪・帯方郡を支配するようになる。卑弥呼の遣使は景初3年のことであった。青龍3年から景初3年の間に、倭の外交関係は公孫氏から魏にかわった。

いわゆる魏志倭人伝を、三国・公孫氏（燕）と東夷諸国との国際関係のなかで位置づけた。

(2) 5世紀を中心とした東アジア諸国の王陵・帝陵を比定した。王権力、王統の整備される時期、王権の発展段階を比較した。北朝・南朝・高句麗・百済の陵寝制・陵園制を分析し、王権力を構造的にとらえた。

高句麗の王陵と陵園 太王陵は北辺68m、東辺約62.5m、西辺約66m、南辺約63mの台形。墓域は南垣牆は約350m以上、東垣牆約220m、北辺は約250mで、西垣牆350m以上である。北牆（幅3～5m、高さ1m）、東牆（幅5m、高さ約1.0～1.5m）と北西隅に「土堤」が遺存していた。墓域は墳丘の約20倍である。墓域は墳丘の20～24倍である。南牆のほぼ中央に門跡がある。墓域内に祭壇と方形壇がある。墳丘の最上壇に石室（西向き）、内部の家形石槨が設置。墓域は東牆、南牆が直線で交差する。墳丘の南辺で「辛卯年好太王造鈴九十六」の銅鈴が出土。辛卯年（391）の好太王（故国壤王）の薨去を悼み、造る所の九十六（番目下賜品の鈴）」（武田幸男2007『広開土王碑との対話』白帝社）の釈読がある。

將軍塚（広開土王陵）は北辺30m、東辺32m、西辺33m、南辺32mの方形積石塚。墓域は墳丘の各辺3倍で、1対9の関係である。31×33.5m（1,038.5㎡）の各辺3倍で墓域は93×100.5m（9,346.5㎡）である。

墳形・護石・石室・墓域に築造規格がある。墳丘・墓域・陵園の規模、構造は王陵、王権力を表象する。

国内城時代の王陵は積石塚である。墳形は矩形から台形・方形、さらに方形化する。墳丘と墓域に四分の一区画（西大墓・千秋塚）、九分の一区画（將軍塚）、不定がある。

護石は板石列（西大墓）から、巨石列にかわり、太王陵（24石）→千秋塚（20石）→將軍塚（12石）にかわる。

石室床面のレベルは墳丘の4分の3（太王陵）から4分の3～2分の1（千秋塚?）、2分の1（將軍塚）に変化する。埋葬施設は禹山下3319号墳（357年）前後から、石槨（竪穴式）から石室（横穴式）にかわる。千秋塚の石室位置は太王陵と將軍塚のあいだに位置する。將軍塚の石室構造は平壤の漢王墓に継承される。漢王墓を長寿王陵と比定する根拠の一で、平壤城遷都後に長寿王の寿陵として造営された。

墳丘と墓域との関係は、將軍塚1対9、千秋塚が1対4、太王陵は1対20～24。太王陵と將軍塚は、墳丘は4対1、石室は1対4の

関係にある。墓域（陵園）は、太王陵の面積は広いが、定形化は千秋塚の段階で1対4になり、將軍塚で1対9の関係になり、整備されていった。將軍塚陵園との近似性から、時期も太王陵よりあたらしい。

西大墓に垣牆で圍繞した墓域、陵園が形成され、將軍塚で発達する。広開土王碑文にみられる烟戸制にもとづく陵園が成立していた。

壁画墳は国内城において、4世紀中葉に出現するが、王陵に壁画が採用されたのは、真坡里9号墳（文咨明王陵）や湖南里四神塚（陽原王）であった。高句麗王陵の墓制は積石塚→石室封土墳→壁画墳へ変化した。

国内城時代の高句麗王陵は巨大積石塚であった。4世紀後半代に方壇階梯積石塚が造営されるが、一辺30m以上の大型積石塚は10数基にすぎない。王・王族級の墓であった。墓群から隔絶し、陵園が形成される。

始祖廟・宗廟・社稷 故国原王2（332）年に王は卒本にゆき、始祖廟を祀っている。故国原王12（342）年に前燕の侵攻で、「美川王廟」があばかれ、尸が奪い去られたと記されているように「廟」が存在した。故国壤王9（391）年に「国社」をつくり、宗廟を修めた。

『三国志』東夷伝高句麗条に宗廟を立て、靈星、社稷を祀るという記事がみえる。国内城に存在した。廟は「美川王廟」のように、陵と一体的であった。

小獸林王から広開土王代に王系が整備された（武田幸男1989『高句麗史と東アジア』岩波書店）。広開土王陵を頂点として、高句麗の王統が完成してゆく。

始祖廟は「卒本」（遼寧省桓仁）にあった。四世紀末葉の米倉溝壁画墓を始祖廟と推定している。巨石を用いた石室で、墓室の構造から將軍塚石室より先行する。壁面を各種の蓮華紋で飾られている。平壤城の始祖廟は文字どおり伝東明王陵である。蓮華紋壁画である。

広開土王陵と長寿王陵 長寿王は前王の広開土王の薨去（412年）にともない、葬送祭祀を実修し、414年に碑を立てた。烟戸300戸を配した陵園を造営した。將軍塚前方右（西南）の丘陵に建物がみついている。その13年後の427年に平壤城に遷都した。

將軍塚＝長寿王陵説、太王陵＝広開土王陵説がある。將軍塚の長寿王寿陵説だ。長寿王は491年に平壤城で没している。葬送祭祀がとりおこなわれたはずであるが、いまのところ5世紀末葉の遺物（瓦・土器など）は未確認である。

長寿王の長子の助多はさきに薨じたが、そ

の墓は真坡里古墳群の4号墳と推定している。王位は長寿王から孫の文咨王に継承された。真坡里9号壁画墳に比定している。

平壤城時代一王陵と陵園一 伝東明王陵は方形石積基壇に方錐形の墳丘をつくる。石室は平行持送り式天井の切石積みである。將軍塚の石室構造とともに桓仁米倉溝1号墳につながる。米倉溝1号墳の蓮華紋壁画との共通性から、平壤城遷都後に造営された始祖陵（廟）とかんがえている。高麗時代いらい始祖として祭られてきた。

漢王墓は長寿王陵に比定できる。漢王墓は平壤の東北方、大同江に開く谷の台地上に立地する。径約54m、高さ約12mの方壇形の封土墳。石室は切石積みで、4段の三角平行持送り式天井で、將軍塚の1段平行持送り式天井に3段分積み上げたものだ。墳丘上に平瓦・丸瓦・巴瓦が並べ葺かれていたという。瓦は平壤遷都直後頃の型式に編年されている。

真坡里古墳群は墳丘と石室構造からみて、真坡里古墳（伝東明王陵）→真坡里4号墳→真坡里9号墳（旧1号墳）→真坡里1号墳（旧4号墳）と変遷する。

真坡里4号墳は長寿王の長子の助多墓、9号墳は文咨明王陵であろう。

定陵寺は伝東明王陵の南辺に低地に位置する。塔・金堂を結ぶ中軸と伝東明王陵の軸と約30度東に振れ、伝東明王陵と定陵寺の造営時期に差異のあることをしめす。長寿王陵や伝東明王陵にせよ、定陵寺との方位のずれの問題はこのころ。文咨明王陵の築造時に、長子の安臧王が陵寺として建立した可能性もある。

土浦里大塚は一辺約30m、高さ約8mの方壇形封土墳。墳丘や石室構造から王陵級で、安原王陵と推定している。安原王の諡は安原王（『三国史記』高句麗本紀第7）、「狹国香岡上王」（『日本書紀』欽明紀6年条）とみえる。

湖南里四神塚は一辺30m、高さ約4mの方台形墳。壇の基底部の列石が配され、その四方に幅約3mの敷石帯がめぐらされる。陽原王（545～559）の諡は「陽崗上好王」である。「陽崗」は河の北岸の崗ないしその南斜面で、湖南里四神塚の立地条件にあう。

匡大山山塊の二つの山頂が、風水地理の「後山」とすれば、「香岡上」と「陽崗上」が土浦里大塚と湖南里四神塚の立地条件にかなう。

江西三墓は平壤の西方に位置する。周囲を山で囲まれた盆地状の平野中央部に立地する。独立丘陵の南に張り出し微高地上に立地する。三墓とも方台形墳で、大墓を中心に逆三角形

状に、東北方に小墓、西北方に中墓と築かれた。大墓は「平崗上好王」の平原王陵と推定できる。小墓は平原王長子の嬰陽王、中墓は嬰陽王の異母弟の榮留王陵とみられる。平原王陵の後方に、兄弟の墓が並列する。

北魏・東魏の陵園制度 魏晋代に衰退した陵寝制度は、鮮卑と漢の文化を結合させたかたちで、北魏で復活した（楊寬1981『中国皇帝陵の起源と発展』学生社）。

北魏の孝文帝は、文成帝（452～465）拓跋濬の妻、文明皇后馮氏の永固陵を481～484年に造営した。その北に寿陵をつくった。洛陽遷都（493年）のため、虚宮となり「万年堂」と称された。永固陵の南、数百mに一辺約90mの城牆がめぐらされた陵園がある。万年堂の南に思遠仏寺（塔院）跡を造営した。高句麗と北魏は冊封関係、平和的な外交関係にあった。

長寿王79年（491）。王が薨去した。その年は98歳であったので、長寿王と諡した。魏孝文がこれを知り、白い冠と長い麻衣をつけさせて、東郊で葬儀を行った。謁者僕射の李安上を派遣し、車騎大將軍太僕遼東郡開國公高句麗王に昇格して冊命し、諡を康といった。

文咨明王28年（518）、王が薨去したので、文咨明王と諡した。魏靈太后は東堂で葬儀を行わせ、使者を派遣して、車騎大將軍の称号を追贈した。このとき魏の肅宗は10歳で、太后が正朝に臨んで、天子の代理をつとめていた。

葬礼のなかに国家間の関係が表象されている。北魏・北朝の思想的影響は5世紀後半以降の壁画の図像（鬼神像・四神図像）にみることができる。

高句麗では平壤城遷都後、定陵寺と真坡里古墳群が造営された。真坡里古墳は始祖東明王の陵の可能性が強い。定陵寺は出土瓦から5世紀末～6世紀初めの文咨明王代に建立されている。寺院と陵墓が結合、仏教思想と他界観が融合する。

陵と寺院からなる陵園制度は、北魏の影響を受けて成立した（永島暉臣「高句麗の都城と建築」）。百済においても6世紀中葉の威徳王代に、扶餘陵山里古墳群（王陵群）の陵寺として陵山里寺跡がつくられた。

高句麗王権と四神思想 高句麗において、壁画墳は4世紀代に載寧江・大同江流域（安岳3号墳）、集安（山城下332号墳、麻線溝1号墳など）で出現する。

陽原王陵は湖南里四神塚で、平壤城の東方の匡大山南麓の「陽崗」の地に陵を定めた。墓室に四神がえがかれ、四神の地にかなう、風水思想にもとづく立地条件に造営されてい

る。四神思想にもとづく統治思想である。

平原王は、平壤城の西の平野に墓域を定め、四神壁画墳を築造した。平原王の諡の「平岡上好王」の名のと通りの立地条件である。

湖南里四神塚と江西大墓では、立地条件が変化する。つまり前者は、丘陵の緩傾斜地に築き、背後に後山（玄武）、東西の丘陵（青龍・白虎）がのびたその中央に陵が築かれる。南には川（大同江）が流れる。まさに「座北朝南」の立地条件である。陽原王の諡である「陽岡上好王」の地理的条件にある。それにたいし江西三墓は、周囲を山・丘陵でとりかこまれた小平野の中央の微高地に立地する。

百済の王陵と陵園—漢城・熊津・泗泚城時代 百済の漢城時代に歴代の王が存在する。現在しられる四世紀代の墳墓として、ソウルの石村洞・可楽洞古墳群がある。そのなかの石村洞3号墳は形基壇積石塚である。西大墓などに匹敵する規模であるが、構造がことなる。4世紀後半には基壇に巨石を積み上げた方壇階梯積石塚が発達する。墓葬の伝播とは直接かかわらないが、高句麗戦争の過程で、故国原王が平壤城で戦死している。積石塚は当時、対戦国、敵国の墓制であった。百済初期の墓葬は楽浪・帯方郡の滅亡と無関係でない。可楽洞古墳など木槨墳系統、塼室墳、石室墳など構造であろうか。

熊津城時代の王陵は宋山里古墳群で、公山城西の山に造営されている。熊津城遷都の四七五年以後に築造された。

宋山里4号墳（文周王）→宋山里5号墳（東城王）→武寧王陵→宋山里6号壁画墳

武寧王陵は南朝梁の墓制の塼築墓を採用した。梁の工人になるもので、墓室構造は同時期のものでないが、宋の南京隱龍里1号墳と類似している。南朝の葬制に規制もあったにちがいないが、南朝の墓制そのものを採用した。武寧王は521年に寧東大將軍を授爵している。高句麗や倭にくらべ、高位の將軍号で、梁と百済の政治的関係をあらわしている。

漢城期の、近肖古王2(347)年に「祭天地神祇」、阿莘王2(393)年に「謁東明廟。又祭天地於南壇」とあり、東明廟を祀っている。宮城の夢村土城の付近に廟と南壇が存在した。南壇で天と地が祀られている。

武寧王陵の北方、同一山塊に艇止山遺跡がある。周濠内に瓦葺建物、大壁建物、貯蔵穴、木柵などの施設があり、殯、始祖祭祀などにかかわる遺跡と推定されている。

熊津期の東城王11(489)年に「王設壇祭天地」とみえる。公山城の南北に天壇、地壇が

あった。艇止山遺跡は公山城の北西方向であるが、「地壇」祭祀関連の遺跡の可能性はある。いずれにしても公的祭祀の場にちがいない。陵園関係の施設といえよう。

また宋山里王陵群の最高所で方壇が発掘されている。埋葬施設のない「虚墓」であった。熊津遷都後に祀られた始祖廟であるかもしれない。

高句麗の長寿王は3万の兵を率いて、百済仁尾に進入し、蓋鹵王を殺害するとともに、八千人の捕虜つれかえったという（『三国史記』高句麗本紀第6）。

蓋鹵王陵の葬地が熊津城にあったとすると、宋山里古墳群の虚墓と関係するのであろうか。

泗泚城時代の王陵は、中下塚（聖王）→東下塚（威徳王）→中上塚（恵王）→西下塚（法王）→益山大墓（武王）と変遷する。

陵山里王陵群の西側、羅城とのあいだに陵寺が造営された。塔・金堂・講堂が南北に並ぶ一塔式伽藍をもつ。木塔跡出土の石製舍利龕銘文の「百済昌王十三□太歳在」「丁亥妹□公主供養舍利」の昌王は威徳王で、13年は567年にあたる。

高句麗の伝東明王陵（始祖）に対する陵寺（定陵寺）と同じ性格のものだ。文咨明王代の高句麗の陵園（陵寺）制の影響がみられる。

百済の統治制度として、五部・五方制がある。五方制は、扶餘遷都後に発達した政治制度で、百済の領域を五方の行政組織に区分して統治した。

陵山里型石室は泗泚城時代の「公」の墓制として発達した。その分布は泗泚城時代の政治領域をあらわすとともに、百済の地方支配が確立し、五方制が浸透したことをものがたる。陵山里型石室という中央支配層の墓制が、規範をもって各地域の支配層（在地首長層・官人層）に受容されていった。7世紀中葉ごろには、平天井式の石室に変化したが、その段階では墓制における身分制は形骸化した。

陵山里型石室墳の北限は公州付近で、漢江流域にはみられない。それは真興王巡狩碑（北漢山城碑）、6世紀後半には新羅の領域下にあったことと無関係でない。

倭の南朝外交は漢城期の百済をつうじておこなわれた。438年の倭珍、478年の倭武の遣使では百済をふくめた使持節都督権を求めている。倭の百済認識があらわれている。

新羅の王陵と陵園 新羅の墓制として、積石木槨墳が四世紀後半ごろに出現する。墳丘・木槨の構造や規模、副葬遺物などから、

王陵としてみとめうる最初は皇南大塚南墳である。慶州盆地の皇南洞一帯に造営され、古墳群が形成されている。

王陵の葬地は、法興王陵をさかいに平野部から山麓にかわる。『三国史記』によると、法興王27(540)年、王は「哀公寺の北峯」に葬られたとある。仙桃山麓の西岳洞古墳群付近だ。6世紀末葉ごろには積石木槨墳から横穴式石室墳に変化する。

皇南大塚南墳(訥祗王)→金冠塚か西鳳凰台古墳(慈悲王)→鳳凰台古墳(炤知王)
→天馬塚(智証王)→西岳洞古墳(法興王)

新羅王の冠飾は山字形金冠である。冠帽の制は6世紀代に発達する京位・外位制の前段階の身分制をあらわす。

慶州盆地の横穴式石室墳は慶州の王京をとりまく山塊の中腹斜面から山麓に立地する。7世紀末葉の新羅王京の条坊が整備された統一新羅成立前後には横穴式石室は王京外に築造される。

金城と陵園 訥祗王19年(435)に、「修葺歴代園陵…祀始祖廟」とあり、歴代の王陵を修築する。また炤知王7(485)年に「親祀始祖廟。増置守廟二十家」(『三国史記』新羅本紀第3)とある。始祖廟祭祀、陵園が形成されていた。炤知王9(487)年に「置神宮於奈乙。奈乙始祖初生之處也」とあり、赫居世を始祖とする神宮祭祀にかわる。このことは、新羅が高句麗による軍事的支配から脱却し、王権力が強大化し、王統・祖先祭礼をつくりあげた。

高句麗の小獣林王から広開土王、長寿王代における王統の整備、社稷、宗廟、陵園の造営とどうよう、新羅においてもおこなわれた。

都城と王陵 広開土王陵(將軍塚)は国内城の左に立地する。平壤城(清岩里土城)の東北に長寿王陵(漢王墓)、東南に文咨明王陵(真坡里9号墳)、東方に安原王陵(土浦里大塚)と陽原王陵(湖南里四神塚)、長安城(平壤城)の西方に平原王(江西大墓)・嬰陽王陵(江西中墓)が立地する。平壤城を核とした王畿内に葬地が造営された。

百済は漢城時代(夢村土城)の南に近接して石村洞古墳群が立地する。熊津時代には公山城の西方に王陵群が位置する。公山城をめぐる羅城は未確認である。城外に葬地が造営された。泗沘城時代に羅城の東に接して、聖王陵(陵山里古墳群)などの王陵群と陵寺が造られた。副都の益山王宮里土城の近辺に武王陵(益山双陵)が築造された。

新羅の5～6世紀代の王都の金城は月城一

帯であった。その西方に訥祗王陵(皇南大塚南墳)などの王陵群が立地する。7世紀末葉に坊里制がしかれたのちは京外に葬地が営まれた。

(3)『東アジア古代の壁画墓』は、高句麗王陵と王権、朝鮮古代(高句麗)の壁画墓、中国古代の壁画墓、日本古代の壁画墓(キトラ・高松塚古墳)で構成している。

高句麗王陵と巨大積石塚—国内城時代の陵園制、高句麗の王陵と王権—平壤城時代の陵園制、高句麗壁画の墓主・墓主行列図像と昇仙思想、高句麗壁画の四神図像と畏獣図像、高句麗・王字紋壁画の系譜関係、高句麗壁画の風景—山水・日月・狩猟図像、漢・魏晋南北朝・隋唐の壁画墓、隋唐の獸首人身十二支像の系統、キトラ古墳・高松塚古墳壁画の系統関係をあきらかにしている。

壁画の図像学的研究から、東アジア諸国の王権・王陵の特質を考察した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

- ①東潮「鳥居龍蔵のアジア踏査行—中国西南・大興安嶺・黒龍江(アムール川)・樺太(サハリン)—」『徳島大学総合科学部人間文化研究』14、65・164、2009、査読無。
- ②東潮「『三国志』東夷伝の文化環境」『国立歴史民俗博物館研究報告』151、7・62、2009、査読有。
- ③東潮「高句麗・百済・新羅・加耶の王陵」『百舌鳥・古市大古墳群展—巨大古墳の時代』『大阪府近つ飛鳥博物館特別展図録』47、122・130、2009、査読無。

[図書](計2件)

- ①東潮・桃岐祐輔・林起煥・姜賢淑『高句麗王陵研究』、53・142(韓国語)、145・195(日本語)、東北亜歴史財団、ソウル、2009
- ②東潮『東アジア古代の壁画墓』学生社、2010年秋予定。現在印刷中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東 潮 (AZUMA USHIO)

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：70243673